

包はシステムにより大石雄介が主宰します。

システム要領

1. 俳句、散文とも分量に制限なく、締切りも各人の自由とする。
2. 各人は、自稿を読ませたい相手に送稿する。その際、送稿がシステムによることを明記する。(注参照)
3. 編集・発行権は原稿受取人に属し、集まった原稿から随意に雑誌をつくることできる。その発行、公開等も随意とする。
4. 発行、公開された雑誌の一冊は、出稿者に送本することとする。
5. 発行経費は、発行者の個人負担とする。
6. システムの新しい仲間への趣旨徹底は、各人の責任とする。

(注) 送稿の際は下記に統一して下さい。

〈当送稿はシステムによります〉

包10号目次

大石雄介句録(3) / 大石雄介

包
包・ぱお
10号
2001・11・15



大石確介句録

3 (H13 6/1 6/30)

猫の子のかくも単純に鳴くなり

空にテロル現れる日や枇杷がたる

枝垂るるは天のもの枇杷がたる

ほくの三か所で軽鴨の子が孵った

五位路の少年初めてからだ開く

山繭蛾の繭を剣に吊って過す

鯉の穴釣は頭を数えいる

草の匂いの君にぶつかって目覚めた

鯉の穴釣昼顔と昼顔のあいだへ

白いもの吊って鯉の穴釣とす

草を流す雨過ぎて人の體白し

ガスボンベにガス充つ夏草は迅し

咽喉垂らした鴉か梅雨の日を支配す

接骨木の花は向こうに抜けるなり

田植とオキ人の家にくどきこと

花菖蒲から似の花へぼく行く

夏の鴉口あけて白く心のほこ心

6/3

2

大石確介句録

3 (H13 6/1 6/30)

猫の子のかくも単純に鳴くなり

空にテロル現れる日や枇杷がたる

枝垂るるは天のもの枇杷がたる

ほくの三か所で軽鴨の子が孵った

五位路の少年初めてからだ開く

山繭蛾の繭を剣に吊って過す

鯉の穴釣は頭を数えいる

草の匂いの君にぶつかって目覚めた

鯉の穴釣昼顔と昼顔のあいだへ

白いもの吊って鯉の穴釣とす

草を流す雨過ぎて人の體白し

ガスボンベにガス充つ夏草は迅し

咽喉垂らした鴉か梅雨の日を支配す

接骨木の花は向こうに抜けるなり

田植とオキ人の家にくどきこと

花菖蒲から似の花へぼく行く

夏の鴉口あけて白く心のほこ心

6/2

6/1

1

へにしじまか交言したま子屋にひかれ
 交言するべにしじまは銀さび
 個にかえってへにしじま羽開く
 青かなふんの羽踏む道であつた
 虎叔りられ一日目は銅に通ず
 犬の糞が群青噴く六月かな
 真竹とも筍ともつかぬもの
 見えぬ火と農薬張って梨畑
 花菖蒲の花は一花で揺れはじめた
 親子して白詰草×ピウスの輪

螢光灯は途中にして曇島華かな
 天井に傾斜ある部屋の蜘蛛たち
 蒼蠅もまらかつていて昂るらし
 梅雨の夕暮ホイル突く子の腰か動く
 黒さなだむし驟くびと夏の何か驟いた
 牛乳の黄箱人より蜂に親し
 鶺鴒の子か君くらういになつて出てきた
 六月や甘細豆に日が入る
 尻斜くと前にも後ろにもあにさい
 交言するべにしじまからほく開いられ

椅子反れば不明深夜のわたし
 蜘蛛の向こうに別の虫めかぬかあるなり
 中学生と螢光灯が虹噴きあう
 夏草の夏茎のいろいろな性具
 梅雨の日の漠然としていろわが自転車
 本能の五位鷺の子かばたはたし始めた
 夏燕かほくに瓜を開けて見せた
 六月の犬負うように子を負う
 燕は地を飛び女の子は泣き暮るよ
 雉の采る田が増えぼくも広くなる

6/16

6/15

10

遠いあいさいまでわか眼蹤いてゆけり
 花菖蒲の花しさいきかかかるよ
 雨の雲雀雨の雪加棒のひとし
 換花挿す使用禁止の便器かな
 香かけは艶艶と額あじさいかな
 短夜の壊れた人から犬の唄
 壊れている人に六月のかたちかな
 梅雨の家の壊れた人間のかたちかな
 夏畑の火を焚く人に二人の妻
 蝸牛の渦を数えて宙にあり

6/14

9

仙入掌は門のゴとき花噴くなり
 六月の鳥の毛ではな毛か散乱す
 夏みかんとしい球体かぼくを走る
 いじめに会う鴨といじめを殺する鴨
 何もなく銀蠅か固まりはいめた
 土鳩の目の赤いこと赤いこと君は
 日の上のちようげんぼうさ六月とす
 投げて投げ尽くせ六月はそういう月
 明神岳に夏の剥離かかさりたる
 ぼうくと立てばぼうくとしている夏の山

6/9

6/8

12

内透けるドライバーと黄金虫かな
 冬の軟膏夏来たれども白透く
 テジタル体温計でい平らな虫たち
 屈折望遠鏡天に向けて梅雨の部屋
 短衣の楊子立ての短い指
 裸以てゆくあいさいの青と白
 頭痛なつっぽき雪白の黄一点
 蛤輪やぼくは体温狩りの日日
 朝から痛い夏風邪も可愛いよ
 ゆすらうのが見えると思いい見ている

6/7

11

真竹のたけのこのさまがまな梢丹
 短夜のギターは兵器かもしれぬ
 わが夏蜜卵と十七種の花を盛るよ
 梅になる途中の梅の器かな
 短夜の七味唐辛子口利くらし
 真竹の蛭皮天井とわか間あにあり
 夏至の夜の電源を断たれたるテレビ
 未だ笑のへらがるモロツコ隠元を引けよ
 肌白き少年がオトバウを抱きおり
 布団ほどの虹を見ているのである

蠅取蜘蛛にほくらキッス突き出すよ
 梅雨の豪雨のわが一点の蠅取蜘蛛
 冷房車はほくらセクスも蛇もできぬ
 蟻の入った最中まと洗う存在と無
 人に有るあじさいの白に朱が差す
 親芋を放置してある昼の銀河
 水か出て点点と五位い鷺の赤い目
 梅雨晴間の屈身体操のわねやすき
 梨木の子か咽喉に詰まるほどになった
 梅雨晴間粘土散らばる道を選いば

生類の足や舌や夏の馬	枇杷の木は放るかたちを連ぬたり	のぼろ菊の黄の目はいつまでも	二十歳で歯を欠き玫瑰の赤い笑	犬の糞見て握力たしかめて加子のサ化	蝕の日の接骨木の木に髓が入るよ	惚け犬と桃の枝は落ろされたり	サ加子畑か鴉を睥睨しておりぬ	山が廻りく蛭蓑状の日かな	肝病心人のここにコスモスは張れよ
------------	-----------------	----------------	----------------	-------------------	-----------------	----------------	----------------	--------------	------------------

6/24.25

16

日日わか虎杖と食い散らして行くもの	傾いて犬吠く乙女は魚顔かな	雉を囲うバラ線とぼくを囲え	袋と打った梨棚俺はここぞで死ぬよ	乾坤や粉いさ象虫かここに	精霊はったの幼齡とこつとあたる	黒猫ひいて竹煮草老人が来る	玉葱を吊るす家の人ほ現れよ	椋鳥はこれと底えがンゴほ眠れ	短衣のこちら向く藤のかたまりかな
-------------------	---------------	---------------	------------------	--------------	-----------------	---------------	---------------	----------------	------------------

6/23

15

6/22

短夜の私の上にあるものたち
 昼寝して體のかたちたどりゆけり
 蚊遣焚いて部屋のかたちと人のかたち
 土鳩かくうくう鳴く六月や人と憎む
 人が壊れたひいぐ南天の実が熟す日
 明神岳が夏雲の鏡でありし
 梅雨明けの街やいま日を鏡とす
 炎天や鳩の背に朱が滲みおし
 一羽にて二羽に給う鳴炎天へ
 首の折れた鴨のことき夏の川

紫陽花の子子の色は手で見ること
 家の鼠が木賊に入るうきうきす
 青き枇杷は天か躊躇うまで放置す
 妻を入れるとすかさず茄子が入るなり
 焼酎が金色なる日家を出ん
 あいさいの大きな厚手揚と戴く
 目のような夕べこの吸殻と露草
 梨を打つ袋の赤か袍とおし有る
 うきうきしてる精霊ぼったの幼齒かな
 花潜はなひんが潜りこんだる體かな

梅雨明け土鳩の頸は親のいろ
 頸細き雀かぬむそうに歩くよ
 籠球ボールの皮の骸や夏の川
 遠ひまわりの黒い瞳かいくつもある
 青かなふんの墓場のやうな朝に出たり
 数萱草の咲いているさえ夏き日なり
 大い舌に歪こがつなボール梅雨明けたり
 虫の骸のあいだを縫って鳥の水へ
 青梨と同じほど濡れて帰った
 君が顔を殴った日の村の花

6/30

20

夏瘦せの五位鷺日かな堰にありぬ
 飛び鴉は人の観念夏の川
 こまだら天牛こいえの片らかな
 葎切かギチユと真似られているよ
 べにしいみが羽を閉じているほくどす
 シヤツの中に蜘蛛が入る君が入る
 雑鳩の黒っほいやつもいる梨なり
 梅酒もスーヒーも空中に立ててよ
 五位鷺の目の真紅が梅雨の天に点る
 痣のことか気になる日や薬の瓶が来た

6/29

19

6/28

—— 11号案内 ——
システムにより発行は不定

包10号 定価 1,000円
2001年 11月 15日 発行
編集・発行 / 大石 雄介
発行所 / 双弓舎
〒250-0851 小田原市 曾比
2793 大石 雄介 方

濡れて帰った六月の濡れ鼠はい
枇杷のあとには白い服の童女かな
濡れて帰って人に言いたい六月
ときどき止む扇風機ときどき存在す